The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	文学論争におけるクロップシュトックの評価 : 文学論争の再考にむけて
Author(s)	福田, 覚
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2020, 17, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77050
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

文学論争におけるクロップシュトックの評価

── 文学論争の再考にむけて ──

福田　覚

ドイツ啓蒙主義研究において、ゴットシェートやスイス派は、彼らが詩学書に書いている概念的、理念的な記述とは別の次元で、同時代や過去の時代の個々の文学作品に対して見せた批評眼や趣味という次元でも評価され、それによってその人物像が描かれてきた観が強い[1]。とりわけ、ゲーテないしは古典主義を頂点とするような、英雄史観的と言ってもよいかも知れない文学史記述においては、その頂点につながる作風の流れというものを物語として見出して、その流れに貢献したかどうか、あるいはその流れに対してそれに沿った批評眼や趣味を示したかどうか、という面を評価する姿勢が取られてきたと言えるだろう。ゴットシェートとスイス派の間で1740年以降行われたいわゆる「文学論争（Literaturstreit）」は、批評眼の違いが明らかになったという面が強く、そうした文学史記述にとって啓蒙主義時代の代表的なエピソードと言える。

本稿では、文学論争の流れに巻き込まれていった観のあるクロップシュトックについて、当時の両陣営に見られた評価の言説を振り返り、文学論争を再検討して詩学史記述につなげていくための準備のひとこまとして、資料の再読を行っておきたい。後世から見れば、クロップシュトックの作品を見る目があったかどうかという観点からどうしても見られてしまう部分である。我々が目を向けたいのは、クロップシュトックについて語るときの物語の枠組みである。

1．ゴットシェートの評価

後世に残された肖像画を取り上げて、「絵のなかで生き続けること（Nachleben in Bild）」という論考を書いたリュディガー・オットーは、ゴットシェートの評判の浮き沈みを次のように記している。

> 「18世紀の30年代において彗星のごとく上昇したあと、ゴットシェートは、40年代以降、増大する攻撃にさらされていた。スイス派のヨハン・ヤーコプ・ボードマー（1698-1783）やヨハン・ヤーコプ・ブライティンガー（1701-1776）との論争のなかで、両派の代表者た

ちは、容赦のない論戦を交えた。ゴットシェートがクロップシュトック（1724-1803）を拒絶したことが、若い世代において、彼の信用を失わせることとなった。」[2]

ここで言われているのは、クロップシュトックという若者に対する評価が、むしろゴットシェート自身の評価の趨勢を変えるのに決定的だったということである。

では、ゴットシェートによるその「拒絶」の様子から振り返っておきたい。たとえば、1751年の『批判的詩論の試み』増補第4版で、ゴットシェートは、クロップシュトックの『救世主』に触れている。このときまだ手に入るのはその詩の第4部までで、作品は終わりそうにないと述べたあと、次のように批判的に言及している。

「その最初の本にいくらかの売り上げをもたらすには、多くの手立てが必要であった。しかしそのすべてをもってしても、一つの詩を養っていくのに、十分なものとはならないようである。この詩が多くの寓話でもって捻り出している宗教的な真理を除けば、識者の喝采が得られるような貴重なものはこの詩にはほとんどない。というのも、この詩は、識者のうちまだ誰一人として味方にできておらず、買収した称賛者の喝采さえまだ得ていないのである。」（第２部前編第Ⅳ章「叙事詩あるいは英雄詩について」§20」）[3]

この部分の記述は、1742年の『批判的詩論の試み』第３版にはもちろんなく、第４版で書き加えられたものである。クロップシュトックの名を響かせた、反響を呼んだ詩歌に対する言辞としては、なかなか手厳しい散々な評価と言える。

同じ第４版の別の箇所にも『救世主』への言及が見られる。

「こうしたローエンシュタインの一派が我々のところでは死に絶えたと思ってはならない。ただ別の姿に変わっただけである。アルプスはその一派に新たな首領を授けた。そしてその庇護の傘の下で彼らは、さらにひどい不調和を考え出してよいと思っている。多くのうちの一つだけを例を挙げると、最近、ベルリンで我々に対して『春』が出版された。これは大騒ぎしてチューリッヒでも後続するかたちで印刷された。だがそれは、チューリッヒの画家たちがこれまでローエンシュタインやノイキルヒに関して撥ね付けてきたあらゆるナンセンスを二倍にするものである。そして、ここで『救世主』から見本に挙げられないものに何があるだろうか。しかしながら、我々ドイツ人の健康的な理性を、すぐにまた目がさめるだろうと、信頼することにしよう。こうした虚飾的な思潮に対抗する手段は、古代のラテン語作家や近代のフランス人作家を読むことである。」（第１部第Ⅷ章「比喩的な表現法について」§25）[4]

『春』というのは、1749年にベルリンで出版された、エーヴァルト・クリスティアン・フォン・クライストの詩である[5]。「チューリッヒの画家たち」というのは、『画家談論』を発行して画家を名乗っていたスイス派を指す。「虚飾的（schwülstig）」と言われているように、クロップシュトックの『救世主』は、フォン・クライストの『春』と同列で、バロックの虚飾過多な表現法の延長上のものとして捉えられている。ゴットシェートに言わせれば、それは、スイス派の趣味の傾向に通じるもので、「健康的な理性」とは相容れないものと考えられている。クロップシュトックを評価できなかったことがゴットシェートの評判を落としたとすると、ゴットシェートとしては依然としてバロック的な虚飾と戦っていたつもりのところで、新たな作風というものを汲み取る枠組みを持ち合わせていなかったことになる。

２.『救世主』の発表からスイス滞在まで

1744 年にブレーメンで創刊された雑誌『悟性と機知の満足のための新たな論叢』（Neue Beyträge zum Vergnügen des Verstandes und Witzes）、通称『ブレーメン論叢』（Bremer Beiträge）において、クロップシュトックが宗教叙事詩『救世主』の最初の３つの詩歌を発表したのは 1748 年のことであった。文学史では、この３つの詩歌が最も重要と見られている。クロップシュトックが 24 歳になる年のことである。その後、『救世主』がようやく完成するのは、1773 年である。

クロップシュトックがこの『救世主』をすでにシュールプフォルテの学校時代から構想していたことは、1800 年 3 月 20 日のハイムバッハ宛の手紙にはっきりと書かれている。

> 「プフォルテにいた思い出がしばしば満足をもたらしてくれるのは、彼の地で救世主の構想をほぼ全面的に仕上げていたからでもあります。」[6]

クロップシュトックはこのシュールプフォルテの時期からすでに、ライプツィヒのゴットシェートと論戦を行っているスイス派に傾倒している。『救世主』が最初に掲載された年である 1748 年の 8 月 10 日、ボードマーに宛てたラテン語の書簡のなかで、クロップシュトックは次のように書いている。

> 「若い私がホメロスやウェルギリウスを読んでいた年月に、すでにザクセンの批評的な書には怒りをもち始めていましたが、そのときに、あなたとブライティンガー氏の批判的論集を入手しました。それを読んだ頃、いやむしろそれをむさぼり読んだ頃は、ホメロスやウェルギリウスが右手にあったとしたら、その論集は参照するために常に左手に待機して

いたのでした。それから私は、あなたが約束しておられた崇高論をどれだけ切望したことでしょう。そしてそれは今でもそうなのです。ですが、ミルトンです。あなたがミルトンを翻訳なさらなかったら、私がミルトンを知るのはひょっとするとひどく遅くなっていたかも知れません。思いがけずミルトンが手に入りました。ミルトンは、ホメロスが点けた炎を高く燃え上がらせ、天界と宗教について歌うよう私を導いてくれたのです。」[7]

ライプツィヒとチューリッヒの間の文学論争に関心を向けていたクロップシュトックだが、そのクロップシュトック自身が論争する両陣営の話題となって、巻き込まれていくことになる。この書簡で「崇高論」と「ミルトン」に言及されている点は注目に値する。というのも、少し結論を先取りして言えば、今後我々が検証したいのは、クロップシュトックの評価をめぐる論争は、ミルトンをめぐる論争の延長上にあり、そのミルトンをめぐる論争は、詩学書の理論面での崇高論をめぐる立ち位置の違いに連動しているのではないか、という点だからである。

1745 年、シュールプフォルテの学校を卒業したあと、クロップシュトックはイエナで神学の勉強を始めるが、1746 年にライプツィヒ大学に移っている[8]。当時、この大学にはゴットシェートやゲラートがいた。ライプツィヒを去るのは 1748 年である[9]。

クロップシュトックの救世主の詩篇が与えたインパクトはとりわけスイスで強く、ボードマーはクロップシュトックをスイスに招待した。1750 年、クロップシュトックはヨハン・ゲオルク・ズルツァーおよびヨハン・ゲオルク・シュルトハイスとともにスイスを訪れ、チューリッヒのボドマーのところに滞在している[10]。スイスを離れてデンマークに向かうのは、翌 51 年である[11]。

３．ボードマーの評価

クロップシュトックのチューリッヒ滞在から少し時間は遡るが、1748 年に初めて『救世主』が掲載されたあと、ボードマーは、1749 年の『新・批判的書簡』でクロップシュトックに言及している。「ドイツの詩の金の時代の接近について」という第 55 書簡に、次のように書かれている。

「私はクロップシュトックがもうすでに救世主である神のことを詩に読むのを聞いた／ミルトンの精神が織り込まれて、クロップシュトックの精神が輝いている／私はもうすでに、クライストからやってくるそよ風の香る翼も見た／それが春に付き従っているのを、庭や野を通り抜けて／勇気をもって力強くオリンピアの草地でそれらが呼び寄せるのは／新たな竪琴、神聖な歌／神聖な歌が心の弦を通り抜けると／そっと忍び足で私の夕べがやって

くる
こうした者たちの書に目をやると、私にはまるで、金の時代に目をやっているようである。
金の時代はそれほど遠くないと想わせてくれる。」[12]

歳を取ってきたボードマーは、美的な学問の鉛の時代が銀の時代となった過去を振り返り、やがては金の時代へと変わることを期待しながら、詩的な友人たちのことを考えている。ゴットシェートが古い時代の名残を見ているものに対して、ボードマーは、新しい時代の到来を見ていることになる。ここで「ミルトンの精神」が織り込まれていると明言されている点も記憶にとどめておきたい。

ヒルツェルによると、1748 年、ボードマーはクロップシュトックの『救世主』のうち最初の三つの詩篇を手に入れたが、同じ頃に、ヒルツェルはボードマーにクライストの『春』をベルリンから届けている。先の第 55 書簡の詩は、歳を取り 50 歳の誕生日を迎えたボードマーの喜びを表している。ヒルツェルはこう記している。

「このことにボードマー以上に心を動かされた者はいなかった。ボードマーは、ミルトンの崇高を理解する趣味をドイツ人に教えようと長い間努力したがうまく行っていなかった。・・・彼は、自らの感激を友人たち全員に伝えた。そして、最初はまったく関心がないように見えたドイツ国民に対して、この現象に注意を向けさせるために、あらゆる手段を用いた。最初の３つの詩篇を『ブレーメン論叢』に載せたクロップシュトックの友人たちでさえ、当初は、その本当の価値を正しく評価することができなかった。エーベルト自身、ズルツァーに対して――私はそれをズルツァーがボードマーに宛てた 1749 年 1 月 18 日付けの手紙で読むのだが――『ブレーメン論叢』の著者たちは、クロップシュトックが前に進めなくても、好ましくないというふうに見ていない、と述べていた。」[13]

クロップシュトックはボードマーが訳したミルトンの作品を読んでいて、ミルトンの崇高さが分かる趣味をもたらそうとしていたボードマーが若いクロップシュトックの詩の価値を認める。ヒルツェルの記述からは、そのような筋立てが読み取れる。新しい金の時代を予感しているとしても、それはここでの記述を読む限り、これまでにないまったく新しいものがやってくるわけではなく、「ミルトンの崇高」を理解する趣味が広がるということである。

４．対立の波紋

再度、クロップシュトックを評価しない側に目を向けると、1751 年に、ゴットシェートが『批

判的詩論の試み』第4版に書いたクロップシュトック批判に続けて、1752年には、ライプツィヒで匿名で発行された書に、こうしたボードマーの姿勢を揶揄する言葉が記されている。

「ところで、一面では、闇と無学の時代、これらすべての作品に、無知や思い込みに対して大目に見られ見逃されてきたものがあり、また別の一面では、近年、タッソーやミルトンに、最も分別のある芸術評論家によって非難されてきたものがあるのだが、そうしたものが我々に対して今、特別な美として押しつけようとされている。そうしたものを、あるチューリッヒの芸術評論家が、ドイツの詩の金の時代の前兆だと、大胆にも吹聴しようとしている。そうしたものは、すべて、ホメロスやウェルギリウスに勝るという。実際のところ、我が国の神学者たちがとても静かにじっとしていて、無神論や宗教蔑視に傾いているこの時代に、そのような新たな宗教的な虚言者たちがどれほど多く真のキリスト教に害になるのか、気づいていないその様子に、逆に驚かなければならないのである。彼らは、見事な熱意で、ツィンツェンドルフの狂信を、とりわけ、目眩のするその歌の本において責め立てるのに、これらの新たな叙事詩にはまさに熱狂の精神が、ただ単にわりと抜け目のない、それほど無趣味ではないやり方で支配しているのだということを見ていない。しかし、まさにそれ故に、新たな叙事詩はそれだけ一層有害であり、伝染するのである。」[14]

この「あるチューリッヒの芸術評論家が・・」というところには註が付され、先に触れたボードマーの第55書簡の詩が引用されたのち、ボードマーを嘲笑する次のような言葉が添えられている。

「ある気ままな友人は、ここで、まるでエルサレムの寺院の古代のシメオンのように、大聖堂にいる歓喜に満ちたチューリッヒ人が両手を挙げてそこに立っているのを想像し、そのチューリッヒ人がうれしそうに叫ぶのを聞く:『主よ、今あなたは、あなたのしもべを安らぎへと向かわせます。というのも、スイス人を照らしチューリッヒの民衆を賛美するためにクロップシュトックが用意した救世主を私の目が見たからです。』」[15]

挑発的な言葉が目に付くが、根底にある両派の感性の分かれ目は、タッソーやミルトンを評価するか否か、ゴットシェート派の側から言えば「熱狂の精神」の悪しき支配を見過ごすのかどうか、にある。

この言葉を直接取り上げて、クロップシュトックの友人であったクラーマーが、1752年の『ブレーメン論叢』で、匿名で反論している。

「このように言う人物を人はどういう目で評価すべきだろうか。とりわけ学者に、真理に

対してだけでなく、啓示の描き方にまで、謙虚さ、豊かさ、中立性、誠実さ、畏敬の念を求める者だとしたら、それらのなかにそれほど多くの、それほど卑しい矛盾に気づくのだから、そのような性格の人物なんてでっち上げ、それもまったくありえないでっち上げだと、この者は自分を説得しないのだろうか。そのような性格の者が本当に存在すると、彼は信じられるのだろうか。」[16]

クラーマーは、ライプツィヒの批評者を次のように批判する。

「よき趣味に奉仕しようという意図で、必須とされる豊かさを看取しつつも、学者の誤りを明らかにするとしたら、それは妬みでもなければ卑劣なことでもない。しかし、次のような芸術批評家がいたら、その性格について、どのような判断がなされるだろうか。・・・自らの詩を宗教の最も崇高な対象に捧げ、そのなかで一貫して、キリスト教に対する深い畏敬の念と、徳に対する高貴な愛を示している詩人の作品のなかに、有害な、キリスト教やあらゆる健康的な道徳の転覆を目指すような、ヘルンフート派の熱狂や、ベーメやフォアデッチュの無意味な熱狂が隠されていると読者を説き伏せようとしながら、こうして言い立てたことを証明の見せかけで飾り立てることさえしない芸術評論家。それぞれの分野で同じように賞賛に値する他の学者たちは言うに及ばず、神学者の間でも詩人に賛辞を述べる人はそれほど普通ではないのに、その神学者の間でさえ、バルムガルテンやザックのような人が称賛しているにもかかわらず、趣味にとって名誉となる世界の救済を歌っている詩を、いくらか名声や評判のある学者なら誰もまずまずだと判断することはできないなどと言ってはばからない芸術評論家。この詩を公に褒めた者全員を、証拠もなしに、金で雇われた賛辞者だと言明する芸術評論家。ミルトンのような人を無知蒙昧だと嘲笑できる芸術評論家。このような芸術評論家の性格についてどのような判断がなされなければならないだろうか。」[17]

言葉の応酬になっているが、クロップシュトックの詩には、「ヘルンフート派の熱狂や、ベーメやフォアデッチュの無意味な熱狂が隠されている」のかどうか、ということが一つの論点として抽出される。クラーマーは、そうではないと言う。クロップシュトックの詩は、「宗教の最も崇高な対象」を歌ったものであり、「キリスト教に対する深い畏敬の念と、徳に対する高貴な愛を示している」という見立てである。

一連の再読の最後に、シェーナイヒが 1754 年に公刊した書に見られる明確なクロップシュトック批判を見ておく。シェーナイヒは、ゴットシェートなどライプツィヒ側の「忠実な取り巻き」[18]と言われる人物である。シェーナイヒの強調する視点の一つは、ゴットシェートも述べていた「健康的な理性」である。

「祖国があるというほどすばらしいことはない。そして、今の時代、健康的な理性がないという結論に達するほど確実なことはない。」[19]

シェーナイヒはそう述べたあと、そうでなければ、B・・やBr・・やKl・・が名声を得ることはなかったと言い、ボードマーの『新・批判的書簡』の第55書簡を引用している。「祖国の恥」といった強い言葉がそれに続く。少し先のページでは、クロップシュトックに悟性はあっても健康的な理性はない、ということも言われている。

５．暫定的な見通し

ここまでで概観してきたクロップシュトックをめぐるやりとりから、今後の研究にどのような示唆が得られるか、暫定的にまとめておきたい。クロップシュトックは、ライプツィヒとチューリッヒの間で行われた文学論争の議論の対象となって、そういう意味で、巻き込まれていっている。そして評者たちのいくつかの言葉が、クロップシュトックをめぐる評価の違いは、ミルトンをめぐる捉え方の違いの延長上にあることを窺わせている。

ゴットシェートやゴットシェート派の側は、「健康な理性」を判断の基準として示し、「虚飾」や「無意味な熱狂」というものを非難しているというのが基本線と見ることができる。反対の陣営は、そうした見方を否定している。従って、クロップシュトックをめぐる評価の違いがミルトンをめぐる評価の違いから生まれているとして、ミルトンがやはり一種の試験紙になっている場合に、そのミルトン評価の違いがどういった理論的立場の違いからきているのかということを、この「健康な理性」、その対義語としての「虚飾」や「熱狂」という概念が示唆しているように思われる。

そこにヒルツェルが考えていた筋立てが加わる。つまり、「ミルトンの崇高」が理解されるかどうかの問題だということである。そうすると、文学論争において、ミルトンからクロップシュトックへという流れが理解されるかどうかは、詩学の理論的な面では、崇高をめぐる評価の違いと連動しているのではないかという仮説的な見通しが得られる。

これらの点を、文学論争の両陣営が啓蒙に対してもっている物語的理解の相違として読み解くとどうなるだろうか。同じ時代のなかで、ライプツィヒとチューリッヒは詩学的な思考と趣味の両端に分かれて対立していたというのが、従来のイメージとしてあったと思われるが、両者の時代感覚を物語の推移として見てみると、ゴットシェートの側は、健康的な理性によってバロックの「虚飾」を乗り越えていくという物語の推移を思い描いているのに対して、スイス派の側は、「虚飾」と呼ばれたものを「崇高」と呼び、それによってゴットシェート的な理性の

基準を乗り越えていくという物語の推移を思い描いているように思われる。

『批判的詩論の試み』第４版でゴットシェートは、クロップシュトックには称賛者がいないということを書いていた。この書き方は、自らの批評眼で論評するのとは異なり、ドイツ語圏の教養読者層の趣味に受け入れられているかどうかで論評しているように映る。その後、クロップシュトックが受け入れられていったとき、ゴットシェートがこのように書いていた文章は、意義を失う。そして逆に、ゴットシェートの批評眼が受け入れられなくなっていったとき、読者層の称賛でもって良し悪しを量ろうとする判断形式は、ゴットシェートに跳ね返ってきてしまう。

この時代、ゴットシェートの側にしても、スイス派の側にしても、真なる詩学書をただ書くことを考えているわけではなく、読者層の趣味の改善を考えている。先に引用したように、ゴットシェートは、『批判的詩論の試み』で、ドイツ人の健康的な理性を信頼したい、古代の作家や近代のフランス人作家のものを読んで虚飾的な思潮に対抗してほしい、と述べていた。ボードマーはミルトンの崇高を理解する趣味をドイツ人に教えようとして苦労していた、とヒルツェルは書いていた。実際に、ボードマーは、ミルトン擁護の書で、ミルトンの信心がドイツ人の心を捉えないのは、詩人の問題ではなく、ドイツの読者の問題だろうという見方を示している[20]。教養読者層の趣味の改善を考えているからと言って、将来的にどこかの時点で趣味判断を完全に委ねようとしているわけではないのだろう。読者層の趣味を彼らが判断していて、論争の反対側の陣営よりはよいと判断される相対的な位置関係にあるので、ときおりその趣味を引き合いに出すものと思われる。従って、根底にあるのは、虚飾を克服していくとか、崇高を理解していくといったかたちで考えられている啓蒙の物語であり、そこにはそれを理論的に支える詩学の自然模倣説があり、それを支える自然模倣説のなかでもその詩論上の機微は虚飾や熱狂や崇高をめぐる評価にあるのではないか、と考えられる。

ゴットシェートの詩学書も、スイス派の詩学書も、理論面では自然模倣説を基本原理としている。対立はしていても、自然模倣やよき趣味の概念は共通基盤としてあると考えられる。そうしたなかで、スイス派の詩学は、真実らしさと不思議なものの結合という考え方に至っている。「不思議なもの」という概念は「崇高」という概念とほぼ重ね合わせて考えられるものである。こうしたことと結びつけて先の両者の物語的理解を考えるなら、ゴットシェートはゴットシェートなりの自然模倣の考え方によってバロックの虚飾を乗り越えようとしているのに対して、スイス派の詩学は、自らの詩学のなかに、自然模倣説を乗り越えようとする原理を持ち込んでしまっているというふうにも捉えられるのだろうか。つまり、真実らしさが模倣説に合致した原理で、不思議なものが模倣説を逸脱する要素を孕む原理で、その両者の結合を追い求めるという姿になっていると考えられるのだろうか。ドイツ啓蒙主義の詩学の歴史を自然模倣説を基礎として記述しようとするときに、文学論争を結論からではなくそこに込められた両陣営の視点や物語的理解から見ていくと、このように記述への示唆が得られてくると思われる。今

後、クロップシュトックに対する評価がその延長上にあると思われるミルトンに対する評価や、そのミルトンに対する評価を反映していると思われる崇高論に対する立場選択に目を向けて、こうしたかたちの考察を続けていきたい。

---

[1] ゴットシェートやスイス派の詩学の概念的、理念的な面については、以下の拙稿を参照。福田覚「ゴットシェートにおける詩学と哲学——悟性概念によって構造化された模倣説」、『希土』24 号、1998 年、2-17 頁；福田覚「ブライティンガー『批判的詩論』と模倣説の歴史」、『希土』21 号、1994 年、69-91 頁

[2] Otto Rüdiger: Nachleben im Bild. Ein Überblick über posthume Bildnisse und Beurteilungen Gottscheds. In: Manfred Rudersdorf(Hg.): Johann Christoph Gottsched in seiner Zeit. Neue Beiträge zu Leben, Werk und Wirkung. 2007, S.376

[3] Johann Christoph Gottsched: Versuch einer Critischen Dichtkunst. 4. Aufl. 1751, S.485

[4] ibid. S.285

[5] Vgl. Ewald Christian von Kleist: Der Frühling. 1749

[6] Friedrich Gottlieb Klopstock: Briefe 1799-1803. Bd.X_1, hrsg. v. Rainer Schmidt. 1999, S.143f.

[7] Friedrich Gottlieb Klopstock: Briefe 1738-1750. Bd.I, hrsg. v. Horst Gronemeyer. 1979, S.13f. Vgl. ibid. S.200f.(Apparat/Kommentar)

[8] Karl Heinrich Jördens(Hg.): Lexikon deutscher Dichter und Prosaisten. Dritter Band (K-M). 1808, S.4

[9] ibid. S.6

[10] Vgl. Kevin F. Hilliard: What the Seer Saw: Klopstock's Journey to Switzerland in 1750. In: The Modern Language Review. Vol. 81, No. 3 (1986), p.655 ズルツァーもシュルトハイスもスイス人である。クロップシュトックがボードマーのところに滞在した話は、ケラーの歴史小説『グライフェン湖の代官』で滑稽に描かれている。「ボードマーがチューリッヒへ呼び寄せた天使のような青年のクロップシュトックとヴィーラントは、ボードマーの神聖な父親的友情と詩的な兄弟関係をあさましく裏切り、一人は、『救世主』に勤しむことなく、大酒を飲む若者たちの群れに加わって、驚くような俗心を顕わにした。」Gottfried Keller: Der Landvogt von Greifensee. 1966 (Universal-Bibliothek 6182/83), S.43

[11] Jördens(Hg.): Lexikon deutscher Dichter und Prosaisten. Dritter Band (K-M). 1808, S.7

[12] [Johann Jakob Bodmer:]Neue Critische Briefe über gantz verschiedene Sachen, von verschiedenen Verfassern. 1749, S.388f.

[13] Hans Caspar Hirzel (Hg.): Hirzel an Gleim über Sulzer den Weltweisen. Erste Abteilung. 1779, S.122f.

[14] Das Neueste aus der anmuthigen Gelehrsamkeit. 1752, S.70f.

[15] ibid.

[16] [Johann Andreas Cramer:] Gedanken über die Frage: Wie weit Erdichtungen in Epopeen, welche Begebenheiten in der Religion zum Gegenstande haben, zugelassen seyn können? In: Sammlung Vermischter Schriften von den Verfassern der Bremischen neuen Beyträge zum Vergnügen des Verstandes und Witzes. Dritter Band, erstes Stück. 1752, S.55

[17] ibid. S.53-54

[18] Peter-André Alt: Aufklärung. 1996, S.155

[19] Christoph Otto von Schönaich: Die ganze Aesthetik in einer Nuss, oder Neologisches Wörterbuch. 1754, unpagiert (Vorrede)

[20] Johann Jacob Bodmer: Critische Abhandlung von dem Wunderbaren in der Poesie und dessen Verbindung mit dem Wahrscheinlichen. In einer Vertheidigung des Gedichtes Joh. Miltons "Von dem verlohrnen Paradiese" ; Der beygefüget ist Joseph Addisons Abhandlung von den Schönheiten in demselben Gedichte. 1740, (Vorrede des Verfassers an die deutsche Welt) unpag.